

## 第四章 佐賀の亂及西南の役

### 一、佐賀の亂

聯隊の組成が成つた翌月の明治七年二月、前參謀江藤新平等が佐賀に兵を起し、其の勢を極めた。

當時は維新の功業が漸くなつたばかりで、未だ社會の諸制度完備せず、従つて動もすれば人心の動搖を來す時であつたので、明治天皇は殊の外宸襟を悩まさせられ、特に吾聯隊に對して出征を命ぜられた。

出發に際し畏くも左の勅語を賜ふ。

勅語

佐賀賊徒征討ニ附殊ニ總督ニ假スニ朕カ親軍近衛歩兵第二聯隊ヲ以テシ朕カ黎元ヲ保護スルノ意極メテ切ナルヲ明ニス汝等能ク斯旨ヲ體シ奮發從事速ニ平定ノ功ヲ奏セヨ  
聯隊長以下大に感激し、一死君國に奉ずるの覚悟を以て、三月二日歩武堂々屯營を出發し横濱から

乗船方、戦地に入らんとする時賊は既に潰散するに至つたため、聯隊は三月十日歸京の命に接し、屯營に凱旋した。

二〇

斯くも速に賊徒の平定を見るに至つたのは、熊本鎮臺諸兵の奮戦に由ることは勿論であるが、一面には、我が近衛兵の出動を風聞して、賊勢頗る挫け闘志を缺くに至つたことも争はれぬ事實である。

## 二、西南の役

西郷隆盛薩南に叛す 明治十年二月、時局に傾した鹿児島私學校生徒間に不穩の舉動が見えたので、明治天皇には先づ勅使有栖川宮熾仁親王を派して、懇ろにこれを慰諭せられんとし給ふたが、勅使の宮の出發に先立ち、二月十二日、西郷隆盛は私學校の生徒を中心とする二萬の壯兵を率ゐ、政府に詰問の筋ありと稱して鹿児島を發し、途上熊本城を圍んだといふ報告があつたので、即日隆盛以下

の官を糾き、征討の旨を仰せ出され、熾仁親王を征討總督に任せられ、全国各鎮臺に出征の命が下つた。

聯隊は二月十九日電營を出發、聯隊本部及び第一大隊は二十日横濱拔鎗、征討總督官を護衛して海

0311

路博多に至り、第二大隊は神戶より陸行して京都に赴き、禁衛軍の任に就いたが、三月十日御守衛の任を歩兵第七聯隊に譲つて、直に戦地に向つた。

出征隊の主なる幹部は左の通りであつた。

聯隊長 中佐國司須正、副官大尉山根信成、旗手少尉南孝元、第一大隊長少佐津野成章、第二大隊長清水敬義

我が征討軍の作戦は、先づ軍を正面軍と背面軍とに分ち、正面軍は博多に上陸して行く／＼賊軍を撃破しながら南下して熊本を救援し、背面軍は八代附近に上陸して先づ賊軍の後方連絡を遮断し、北進して正面軍と力を協せ、南北から賊を挟撃して、熊本城の重圍を解こうとするにあつた。

戦闘の經過 この戦役に於ける我が聯隊の損害は下士以下戦死三百六十名に達したのであつて、犠牲者の多かつたといふことは取りも直さず最も勇戦に奮闘したことを物語るものである、元來この西南の役は、徵兵令施行後初めての戦役であつて、殊に敵は名に負ふ薩摩軍人の壯兵、官軍は新らしく徵募した庶民兵であつた。慷慨血氣の賊軍は、好んで拔刀隊を組織し、白刃を抜き連れ、突進して我が陣地に斬り入るのを最も得意とし、事實自兵戦に於ては、官軍は殆ど勝算なく、拔刀隊の聲を聞くや、官軍兵は忽ち一種の恐怖に襲はるゝといふ有様であつたが、此の間にあつて獨り萬丈の氣を吐き

皇軍の威武を示したものは、各鎮選抜兵を以て編成の我が近衛隊であつた。彼抜刀を以て迫れば、我は銃槍を以て之に應じ、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取り、かつて退くことを知らず、後には赤帽の往くところ、終に敵影を見ない様になつた。以下戦闘の経過を略述しよう。

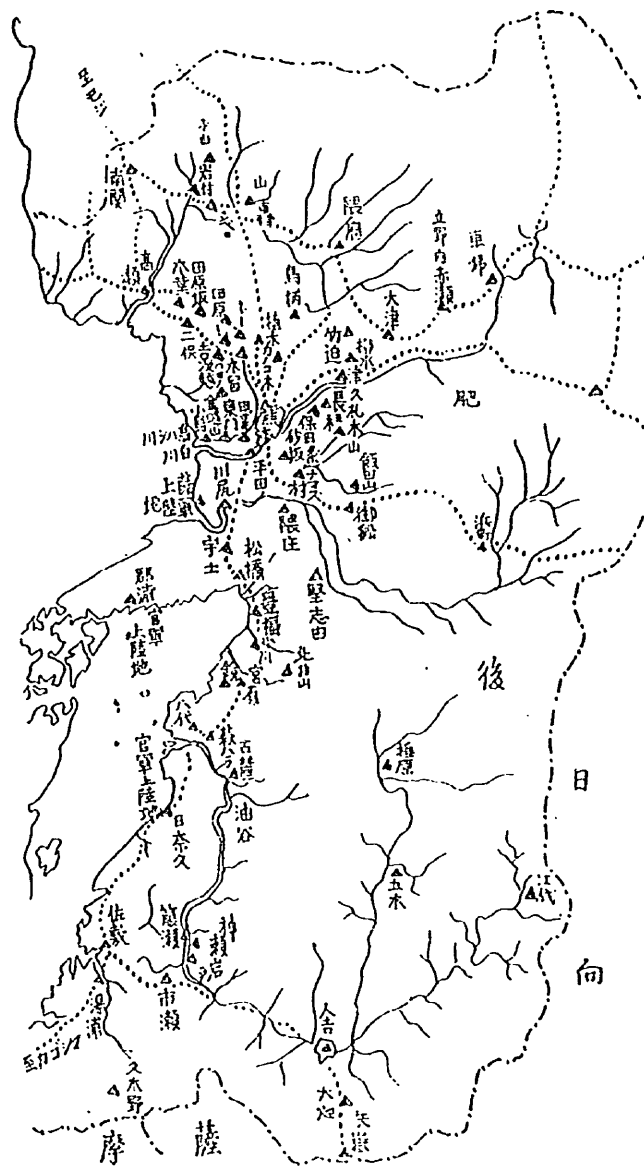
二二

聯隊は正面軍に属し、第一大隊(隊長)は第三旅團下にあつて、山鹿方面に戦ひ、第一大隊第一中隊及第二大隊は二俣に據つて第二旅團に入り、三月十日田原坂を攻略し、賊を向坂に壓迫して、同月二十三日山鹿口の官軍と連絡を通じ、茲に我が聯隊は始めて植木に於て相會することを得た。

爾後諸所に轉戦し、四月十五日熊本城の重圍を解いて、連絡するや、聯隊は再び二つに分かれて、第一大隊(隊長)は鹿兒島地方に進進し、第二大隊及び第一大隊第二中隊は第一旅團に属して日向に向ひ、各地に轉戦して、賊軍を殲る所に及べし、漸次之を南方に壓迫して、九月三日各道追討の官軍齊しく鹿兒島に會した。かくして賊を城山に追ひ詰め、九月二十四日拂曉、暗を破つて聳きたる三發の轟砲を合図に、各旅團の突撃部隊は、四面齊しく起つて城山に迫り、遂に賊を岩崎谷の東口に追ひ詰め、高地に據つて八方から之を砲射した。賊兵今はこれ迄と思ひ、隆盛以下の幹部は悉く自決し、城山の露と消えたのである。

此戦役中、二月二十六日の鍋川に於ける戦闘は我が聯隊史上特筆すべきものである。乃ち此の日

0313



0314

乃木少佐の率ゐる歩兵第十四聯隊第一大隊は山鹿附近鏝田川に於て、優勢なる賊軍と遭遇し、腹背に敵を受けて、非常の苦戦に陥り、死傷甚なき情況にあつた。我が國司聯隊長の率ゐる第一大隊（中隊）は博多に上陸以來、殆んど休むことなく、即時戦地に向つて急行軍をして居たが、途中此の戦戦の體に接し、直に戦場に急行聯隊長は軍旗を先頭に樹立して、勝ち誇る賊陣を目覚めて勇猛果敢なる突撃を決行し、大いに賊軍を破つて、近衛兵の威力を示したが、此戦陣に於て旗手南孝光少尉は賊の狙撃を受けて、壯烈なる戦死を遂げ、其の鮮血はほとばしつて軍旗の旗竿を染むるに至つたのである。

凱旋 九月二十七日、征討總督熾仁親王殿下鹿兒島に入り大隊長以上を召して祝宴を張らせられ、征討旅團の凱歌を解き凱旗を命ぜらる。かくて十月十七日、聯隊は屯營に凱旋した。

十一月二日、天皇陛下特に日比谷練兵場に臨幸、近衛諸兵の凱旋式を舉行せられ、左の優渥なる勅語と共に酒肴料を下賜せられた。

## 勅語

貴ニ西南賊徒征討ニ際シ各地奮戦遂ニ平定ノ功ヲ奏ス朕深ク之ヲ嘉ス

尙此の戦役中三月十六日、天皇陛下には戦勢御慰問として、侍從番長高崎正風を戦線に差遣せられ優渥なる聖旨を傳達せしめらるゝと共に、軍人軍屬並に傷病者に酒肴料又は菓子料を御下賜あらせら

れた。また皇太后、皇后兩陛下より負傷者に對して、左記目錄の御下賜品があつた。

- 一、綿織糸 百端 一、英吉利リント 二十卷 一、帛木綿 五百端
- 一、葡萄酒 千五百本 一、煙草 八百斤

## 第五章 日清戦争及臺灣守備

### 一、日清戦争

開戦の理由 日清戦争の遠因ともいふべきものは、明治十七年韓國京城の變、防殺令事件、及び二十六年の金玉均暗殺事件等であるが、その直接の原因となつたものは、二十七年四月、韓國に起つた朝鮮の東學黨の亂である。この東學黨は、武力を以て國政の改革を斷行しようとし、先づ北邊の諸道に風靡して、五月全州に據つて將に京城を衝かんとした。從來動もすれば韓國を屬邦扱ひにしてゐた袁世凱（當時の駐韓公使）は、韓國を名實共にその屬邦となすはこの時にありと、狼狽恐怖せる韓國政府を脅迫して、強ひて清國に出兵を請はしめ、天津條約を無視して、ほしきままに韓國に向つて出兵した。そこで我が政府は、急遽大島圭介公使をして、八重山經の陸戰隊を率ゐて京城に入らしめ、ついで

0316